Vol. 116, No. 7 September 2019

題字　一萬田 尚登 第 5 代日印協会会長

月刊 インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 116 年）

インド北東部の文化と自然

上：マニプール州の伝統舞踊 マニプリ
（写真提供 Government Dance College, Department of Art and Culture, Government of Manipur）

右：アッサム州の世界自然遺産 カジランガ国立公園
（Wikipedia より）

目次

1. インド最北東部 最新事情見聞録 2019
～七姉妹（セブン・シスターズ）を訪ねて～ ······ P. 3
2. 東北インド一人旅から日印交流を想う ······ P. 7
3. 日印協会は国際文化会館と戦略的パートナーシップに合意し覚書を締結 ······ P. 10
4. G20 大阪サミット学生ボランティア体験記 ······ P. 11
5. インドニュース（2019 年 7-8 月） ······ P. 13
6. イベント紹介 ······ P. 18
7. 新刊書紹介 ······ P. 20
8. 掲示板 ······ P. 23

1. インド最北東部 最新事情見聞録 2019
～七姉妹（セブン・シスターズ）を訪ねて～
Exploring Far Northeastern India in 2019
- A Visit to the Seven Sisters -

公益財団法人日印協会理事 山田真美

インドの最北東部に「七姉妹（セブン・シスターズ）」と呼ばれる七つの州があることをご存じでしょうか。

広大なインド亜大陸の一見「東の果て」のように見える西ベンガル州を超えて、さらに東へ向かい、インドがネパールとバングラデシュによって南北両側から挟まれ、ひどく細くなっている箇所をさらに東へ進むと、再びインドの国土が大きく広がって、その奥に探し求めていた七姉妹がひっそりとたたずんでいます。

インドの七姉妹州 （Wikipedia より）

七姉妹とは、アルナーチャル・プラデーシュ（以下、アルナーチャル）、アッサム、マニプール、メーガーラヤ、ミゾラム、ナガランド、トリプラの七州のこと。

このうち誰もが知っているのは、紅茶の世界的産地として知られるアッサムぐらいで、残りはいずれも日本人に馴染みの薄い地名かも知れません。

けれども「第二次世界大戦中の激戦地であったインパールとコヒマは、それぞれマニプールとナガランドの州都ですよ」と言われれば、この地域に対する見方も大きく変わってくるのではないでしょうか。

七州のうちのいくつかは原油と天然ガスの産地であり、なかでもアッサムの原油埋蔵量と天然ガス埋蔵量は、それぞれインド全体の 26%強と 12%強に及びます。またチベットに発し、インド北東部からバングラデシュを経由してベンガル湾に注ぐ全長 2,900km のブラマプトラ河がもたらす豊かな水資源も、この地域に限りない可能性を与えていると言えましょう。もっとも近年は上流の中国でダムが建設され、水利権や環境問題をめぐって深刻な軋轢が生じていることが懸念されますが。

いずれにせよ、中国、ブータン、バングラデシュ、ミャンマーに囲まれ、極めてデリケートな国境地帯に位置する七州が、地政学的にも水政治学的にも極めて重要なインドの要であることは間違いないでしょう。

なお、ほぼ同じ地域に位置するシッキム州が「姉妹」の仲間に入っていないことを不思議に思われる向きもおありでしょうが、シッキムは 1975 年にインドに編入されるまで歴とした独立国（シッキム王国）。七姉妹とは異なる歴史をたどって現在に至るため、別扱いをされることが多いようです。

本稿では、2019 年 6 月にインドから招待を受けてアルナーチャル、マニプール、アッサムの各州を訪れた筆者が見聞したことを、限られた紙面の中でご報告したいと思います。

1. アルナーチャル

今回、インド最北東部を訪問することになったそもそもの経緯は次のとおりです。

アルナーチャルの南東部に位置する東シアン県オヤン村に、今年、「ヒマラヤ・グローバルスキル研究所」（略称 HIGS)という名の教育機関が新設され、筆者は縁あってそこの顧問に任命されました。

同研究所の創設者オマーク・アパング氏は、バジパイ政権下の 1998 年、27 歳の若さでインド共和国史上最若年大臣として観光大臣に就任された方。

大臣時代から何度も日本を訪問してこられたオマーク氏は、いつしか日本文化を心から愛するようになり、（アルナーチャルの若者たちに素晴らしい日本文化と技術を学ばせてやりたい）と考えるようになったようです。

「そのためには、若者たちに日本語を学ばせ、日本へ技術研修に行かせなければ」

こうして私財を投じて設立なさったのが、冒頭で述べた研究所です。グローバルスキルと銘打たれてはいますが、現在、力を入れているのは日本語教育。オマーク氏から「実際に教室を見て、教育方法などに改善できる点があったら是非とも教えて欲しい」との要請を受け、さっそく現地へ向かうことにしました。

筆者は縁あって 20 年前からアルナーチャルへ足を運んでいますが、そのイメージを一言でいうならば「地の果てのように遠い場所」。外国人の入域に特別許可証（Protected Area Permit ＝PAP)が必要なことも、この地域をさらに遠いものに感じさせます。

今回も「地の果て」を目指す覚悟で、まずは成田からデリーへ。さらに国内線に乗り換えてディブルガール空港（アッサム）へと飛びました。

問題は、その先に横たわるブラマプトラ河です。とてつもない河幅と水量は、河というより巨大な湖のよう。河岸に置かれた古ぼけた椅子に座り、いつ来るとも知れない船を待っていると、やがて、恐ろしく年季の入った木造船がやって来ます。乗員に対して座席が足りず、元気な人は操舵席の屋根によじ登って場所の取り合い。救命胴衣などあろうはずもなく、安全航行はほとんど神頼みです。もっともブラマプトラは「梵天の息子」という意味ですから、河の名前からして既に神懸かっているわけですが。

とまあ、アルナーチャル行きと言えば、これまではそのようなイメージだったのです。

ところが今回、状況は一変しました。2018 年 12 月にボギビール橋（全長 4.9km の鉄道道路併用橋）が開通し、インフラが一気に整備されたからです。工期約 20 年、総工費約 880 億円を投じて完成されたこの橋、マグニチュード 7 までの大規模地震に耐えられるのみならず、最重量級の戦車の通行や戦闘機の離発着も可能とか。

思えばアルナーチャルは 1962 年の中印国境紛争で激戦地となった場所。半世紀以上も昔の話ですが、2006 年になって尚、駐インド中国大使（当時）が「アルナ―チャルと呼ばれているところは全て中国の領土」と発言するなど、いまだに難問を抱えた国境地域であることは間違いありません。

ともあれ今回、橋の完成に伴って、オヤン村が 2018 年以前に比べはるかにアクセスしやすい場所になったのは喜ばしい限りです。

研究所では 17 歳から 27 歳まで、約 20 名の学生たちが真剣な面持ちで日本語の授業を受けていました。彼らの何人かは日本人とよく似た顔立ちで、古風なたたずまいが昭和の学生を彷彿させます。日本語教師はデリーから派遣されてきたインド人。最も辺境とされるアルナーチャルへ単身赴任して来たのですから、相当なガッツの持ち主といってよいでしょう。

筆者はしばらくオヤンにとどまって、主に日本の伝統文化や歴史について講義をし、放課後は学生たちに連れられて川で泳いだり、何千何万というホタルが飛び交う夢のような景色の中を歩いたり、手つかずの大自然を堪能させていただきました。

橋が架かってようやく基礎的なインフラが整い始めたばかりのアルナ―チャル。まだ課題は山積していますが、その中で夢をもって日本語を学び始めた若者たちを、これからもできる限り頻繁に訪ね、見守り続けたいと思います。

ヒマラヤ・グローバルスキル研究所にて（前列が筆者）

2. マニプール

はるばるアルナーチャルまで行って、そのまま日本へ帰ってしまうのは勿体ない。そう考えていたところへ朗報が飛び込んできました。マニプール州の州都インパールに平和資料館が完成し、インパール作戦 75 周年の慰霊祭を兼ねた開所式が挙行されるというのです。

インパール平和資料館オープン初日の風景

実は、筆者はインド研究者であると同時に、カウラ事件（1,000 人を超す日本兵捕虜が第二次大戦中の 1944 年に豪州カウラの捕虜収容所で起こした集団自決的暴動）の研究者でもあります。当然、インパール作戦についても以前から深い関心を持っており、インパール事情にお詳しかった日印協会顧問の三角佐一郎氏（2018 年、101 歳で逝去）からも、貴重なお話をたびたび伺っておりました。

そのような経緯があり、迷わず開所式に出席することにしました。

インパール作戦の概要は広く世に知られていますので、改めて述べることはしませんが、75 年前のこの作戦では多くの日本兵が病死または餓死したことが知られています。日本軍が退却したあとの道には遺体が溢れ、白骨街道と呼ばれて凄惨を極めたといいます。

今回、インパール滞在中に市井の人々と話す機会が幾度かあったのですが、印象的だったのは「このあたりにはいまだに日本兵の幽霊が出るんです」と真顔で語る人が多々いたこと。

幽霊の存在などはなから信じていない筆者ですが、人々が異口同音に「日本兵が青白い顔で立っているが、こちらから近づくとスーッと消えてしまう」、「自分は見ていないが、亡くなった両親が見たと言っていた」、「レッドヒル（日本軍と英国軍の激戦地）の一帯では、今でもよく怪現象が起こる」などと話すのを聞くにつけ、75 年前の出来事が彼らの心にいかに大きなトラウマを残したかを痛感させられました。

ところで今回、平和資料館が開所した背景には、インパールの皆さんの長年にわたる努力があったようです。その中心人物が、マニプール州観光フォーラムにお勤めのアランバン・アンガンバ・シン氏。

きっかけは、ある時シン氏のもとへ持ち込まれた一丁の十一年式軽機関銃でした。インパール作戦で亡くなった日本兵の持ち物と思しき銃。ひと目見て、シン氏はなぜか心を強く揺さぶられました。

（歴史をきちんと後世に伝えなければ――）

それ以降も色々な人が持ち込んでくる品をシン氏は大切に預かり、自宅の二部屋を開放して展示。2014 年からは「戦争資料館」として一般公開を始めたといいます。

それから 5 年後の今年、「戦争」資料館は「平和」資料館として生まれ変わりました。6 月 22 日に行なわれた開所式には、ビレン・シン・マニプール州首相、平松賢司駐印日本大使、アスキス駐印英国大使、笹川陽平日本財団会長らが参列。慰霊祭、桜の植樹、安倍晋三首相の揮毫による書（平和）の除幕式などが盛大に行なわれました。

当日は日本から遺族の方が 5 名ほど参加なさっていましたが、そのうちのお一人は、ご自身は戦争を知らない世代であるにもかかわらず、亡き母上の遺志を継ぎ、インパールで命を落とした大叔父君の消息をいまだに探していらっしゃるとのこと。戦争はまだ終わっていないとしみじみ想った瞬間でした。

平和資料館の入場者数は、6 月末の一般公開から約 2 か月で 3,500 人を超えたといい、その中には 200 人を超える生徒が社会科の勉強に訪れたケースもあったようです。同館が日印親善と世界平和のために長く寄与されますことを、心からお祈り申し上げます。

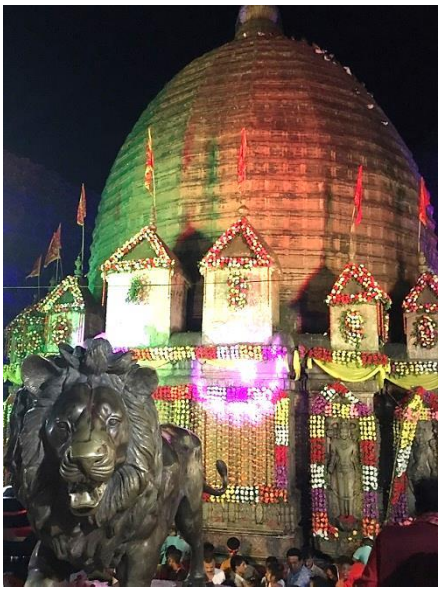
3. アッサム

旅の最後に訪れたのは、紅茶の産地として世界にその名を知られるアッサム州でした。七姉妹を合わせた人口 4,598 万人のうち、アッサムの人口は全体の実に 68%に当たる 3,120 万人（2011 年現在）。インド最北東部における同州の存在感は突出しているといってよいでしょう。

その中心都市であるグワハティは、バラモン教（ヒンドゥー教の前身）の聖典である『プラーナ』文献や、大叙事詩『マハーバーラタ』にも登場し、7 世紀には玄奘三蔵も訪れるなど、歴史ファンにとって見逃せない場所。

今回、筆者はインド工科大学グワハティ校で日本文化をテーマに特別講義をさせていただいたのですが、ここではその滞在中に訪れた不思議なお祭りを簡単にご紹介してこの稿を閉じたいと思います。

グワハティに着いた日は、偶然にも年に一度の祭礼当日でした。祭りの名は「アンブバチ・メラ」。シヴァ神の最初の妃であるサティー女神を縁起とする祭りで、カマキャという名の女神を信仰する人々で 4 日間にわたって大変な賑わいを見せるとのこと。何かのご縁と思い、急きょ行ってみることにしました。



年に一度の大祭アンブバチ・メラで
賑わうカマキャ寺院の美しい外壁

神話によれば、その昔、サティーの父親は娘婿であるシヴァ神が気に入らず、神々を招いて行なった供犠祭の席にシヴァだけを招きませんでした。これに抗議してサティーは焼身自殺。妻を失ったシヴァは狂気にかられてあらゆるものを破壊し、見かねたヴィシュヌ神がスダルシャナ・チャクラ（円盤型の武器）を用いてサティーの遺体を 51 個に切り刻むことでシヴァの正気を取り戻させました。

「シャクティ・ピータ」と呼ばれる 51 個のサティーの身体パーツは、インドじゅうに降り注ぎ、それぞれの地で女神に生まれ変わったと神話は説きます。例えば、彼女の臍はオリッサ州に、左の乳房はパンジャブ州に、心臓はジャールカンド州に落ち、女神として再生したと。

グワハティの地に落ちたのは、サティーのヨーニすなわち女性器。そのことから、アンブバチ祭は最初の 3 日間が女神の生理日という設定になっており、なんと寺院の扉が閉まって中に入ることが許されないのです。4 日目に（女神の生理

が終わったという設定のもと）扉が開くと、信者はようやく中に入ることができます。御開帳ならぬ、いわば御閉帳。祭りのときだけ寺院が閉まるとは、全くもって前代未聞の体験でした。

物の本によると、この寺院に神像はなく、代わりにヨーニ型の石像が置かれているようですが、写真撮影厳禁のため内部の様子を窺い知ることはできません。

次回はぜひとも寺院の中に入れていただき、アッサムの宗教観についてじっくり考えてみたいと思います。ご精読ありがとうございました。

※筆者は作家で博士（人文科学）。2001 年から日印芸術研究所言語センター長（インド政府認可法人）、2010 年から日印協会理事、2015 年からはインド工科大学ハイデラバード校客員准教授を務めている。
近著に『運が 99%戦略は 1% インド人の超発想法』（講談社）。

今号で記事を書いてくださった山田真美先生は 9 月 29 日（日）13:00～14:00 にナマステ・インディアで講演『観光ガイドに載っていないインパールとその周辺の最新情報』を行います。詳しくは本誌 19 ページをご覧ください。

2. 東北インド一人旅から日印交流を想う

Imaging Indo-Japan Relationship through Lonely Trip to Northeast India

元日印交換留学生、Ph. D. 日印比較文化論、鏑木義博　個人会員

1. 一人旅の楽しみ

近年、東北８州（Seven Sisters＋ シッキム、更にダージリンの在る西ベンガル州北部も実質東北インドの範疇）へは、アッサム・ナガランド・マニプール三州を中心に春夏の年二回巡回しており、今までの訪問地は 50 余ヶ所に及ぶ。インド駐在勤務を終えて 55 歳で早期定年退職、2002 年インド政府の奨学金を賜る幸運に恵まれてパンジャーブ大学に留学以来「未知との遭遇・ヒトとの出会い」を求めて気ままな一人旅を楽しんでいる。 旅行計画は、考古遺跡と自然観察を軸に、各地に居住する友人・知人訪問で結んでいく。 移動手段は鉄道・バス・乗合タクシー（3 列シートで乗客 11 名鮨詰め）を中心に、身軽なフットワークで倹約･地元密着を心掛ける。常時訪れるスポットを中心に、多岐に亘る各地の生活文化を体感。即ち、市場（バザール）で日常生活を連想、街角の食堂で食習慣・嗜好を味覚、鉄道駅・バスターミナルでヒトの往来を実感、ブック・スツールで最新情勢・流行を把握、博物館で歴史・文化伝統を知見、寺院・教会を参拝し生活倫理の源たる信仰と建築様式の典型を見聞、各種学校の先生・学生と交流し随時日本紹介の講義など、タウン・ウォッチングに留まらず田園・村落にも足を運びインド社会の原点を究めようと工夫している。

2. 東北インドと交わる切掛けから定期巡回へ

元来、大東亜戦争末期に発起されたインパール作戦に興味を持っていたが、デリー駐在勤務時（1997-99 年）には、東北インドの治安は悪くアッサム州グワーハーティーへの出張も現地支店長から止められる程。留学時インパール出身の学生との交友が縁で実家を紹介され、帰国後 2011 年にデリーから空路インパールを初訪問。当時は田舎巡りにライフル携帯のボディガード同伴を助言され、幹線道路でも装甲車と共に兵士が地雷探知機をかざして巡回するのを見かけた位であった。

マニプール州モレよりミャンマー・タムへ国境の橋
（筆者提供、以下同様）

今もアッサム・ライフルなど国境警備隊の駐屯地が要所に配置されチェックポストを設けて通行検査を怠らない。ナガ族独立運動など武装集団と州政府との完全和平締結には未だ至っていないが休戦状態で、治安は改善・安定している（但、選挙・ストなどで騒動となると不穏な空気が流れ注意を要する）。 一般情勢の好転に伴い、各州都から奥地へと徐々に拡大、2019 年 3 月には国境開放とビザ免除もありインパールからモレへミャンマー国境を通過しチンドウイン河を跨ぐ印緬友好橋を往復してきた。

3.　東北インドの特質

地域特性を概観すると、総じてインド中央部との異質面が目に付く：

▶**内陸部：** ヒマラヤ山麓（シッキム・アルナーチャルプラデーシュ両州）を北に望み、チベット高原東端で大曲折し東西に向かうブラマプトラ流域（アッサム州）、チンドウイン河で東方を隔てられ南北に走るアラカン山脈（ナガランド・マニプール・ミゾラム各州）、マニプール州西部はロクタク湖を擁するインパール盆地、東西に横たわるガロ・カシ丘陵（メーガラヤ州）がブラマプトラ・ガンジス合流デルタ（ベンガル地方）を北に区切る中、東南でデルタに繋がる（トリプラ州）。

▶**最多雨地帯：** モンスーン気候と照葉樹林帯。

▶**辺境地帯：** ネパール、ブータン、中国チベット、バングラデシュ、ミャンマーの狭間。

▶**東南アジアとの接点**：中世にビルマ勢の侵攻とアッサム・マニプールなど王国分立、近世に英国の進出・ビルマ勢の駆逐・保護国化、インド独立に参加・編入・各州に分割発足、直近では Act East Policy の最前線。

▶**部族社会：**南方モンゴロイド系の多数の部族村落社会にインド中央よりインド・アーリヤ系が侵入。 ネパール・アッサム・マニプール・ベンガル語など、チベット・ビルマ言語系が主流でヒンディー語は馴染まず英語が共通言語。 自然精霊信仰（アニミズム）がヒンドゥー教と習合、更にキリスト教に改宗、中世以降ブラマプトラ流域沿いにムスリム浸透。 ヒマラヤ山麓はチベット仏教圏。

▶**重層社会：**伝統的に分散する部族村落生活圏に、郡・州・中央政府の行政段階を踏まえた近代国家領域が被さる。

▶**多数のキリスト教徒：**各地で一番立派な建物は教会・ミッションスクール（収入の 1 割をお布施）。 聖書を肌身離さず英語に堪能（西欧的な思考・風俗習慣に親和）。

4.　東北インドの旅行事情

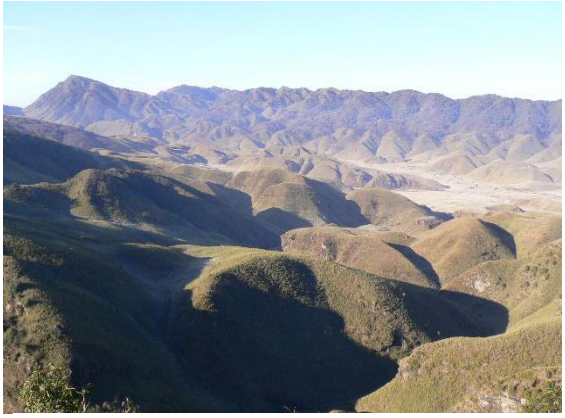
▶**足：**通常、東北インドへはデリーまたはコルカタからグワーハーティーまたはインパールに飛ぶ。 陸路では、コルコタから夜行列車でグワーハーティーに至り、そこから各地へ列車・バス・乗合タクシーの旅となる。 ミャンマー国境沿いに 2000m 前後の幾多の山系が南北に走り、東西横断は尾根・谷の昇り降りで難渋する。 特にアッサム州南部シルチャルからインパールへはインド随一の過酷な陸路（現在数カ所でトンネルを掘削し鉄道の延長工事中）。 ミゾラム州都アイザウルとインパール間の陸路も峻険で峠で仮眠の二日行程（アイザウルへはシルチャルからバスもあり）。

▶**宿：**街中ではエアコンなし・天井扇・シャワー（湯はバケツ・サービス）・トイレ付き一泊 1,000 ルピー前後（州政府運営の Tourist Lodge もお勧め）。 鉄道利用の際は、駅構内 Retiring Room が安くて便利、掃除・シーツ交換などメンテナンスも行き届く。

▶**食：**路傍の茶店などで定番のプーリー・プランタ・パコラなど、州都中心に Fast Food 店もちらほら見かける。定食はポーク・川魚揚げ・野菜煮付け・米飯が中心、東南アジア風で余り辛くない。 交通移動中は駅・バスターミナルのキオスクでビスケット・バナナを購入し軽く済ますのも体調管理に良い（ボトル・ウオーターは必携）。

5.　東北インドの見所

自然・文化（特に考古学）・戦跡など、筆者の関心分野からのお勧めスポットは：



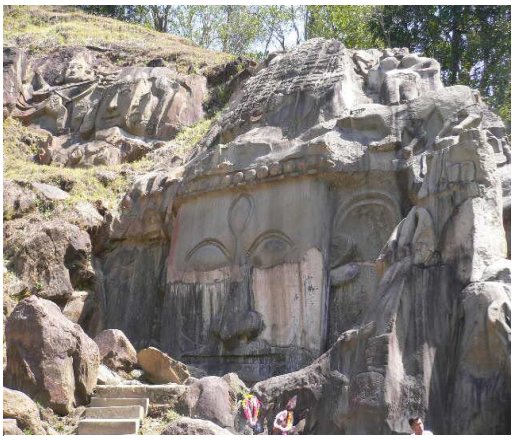
マナガランド州ズコウ渓谷の大草原

▶**山紫水明：**氷雪のヒマラヤの峰々を降ると緑豊かな樹林帯に覆われ寄生蘭の黄・藤色鮮やか。 メーガラヤ州チェラプンジは世界最多雨地で大滝・洞窟が散在。 アッサム州カジランガ公園は 1,900 頭弱の一角犀が棲息。 ロクタク湖に水草の浮島点在。 Lost World のように崖を登ると草原が広がるナガランド州ズコウ渓谷。 更にコヒマ背後のジャプフ峰（3048m）の尾根筋には樹高 30m 超の石楠花が群生。洞窟群はナガランド大学などが化石人骨・生活遺物発掘に積極的。

▶**磨崖彫刻：** インドでは珍しい表現形態だが、トリプラ州ウノコティ・チャビムラ、アッサム州ハジョなど磨崖・

岩石に浮彫したシヴァ・ガネーシャなどのヒンドゥー神像は日本の磨崖仏・石仏を連想させる。 アッサム州ガルパラー近郊のスールヤ・パハル遺跡はヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教が並立し磨崖・岩石に神像・リンガヨーニ・ミニストゥーパが多数刻まれており、マハーラーシュトラ州エローラの三宗教僧院並立を想起させる。 ディマプル古都跡に男根様の石造物群。 各地の部族村落で見かける石積みの円形壇・モノリス石柱群・磐座はアニミズム信仰の伝統。

アッサム州スールヤ・パハル岩えぐり抜きストーパ



トリプラ州ウノコティ磨崖彫刻群

▶寺院建築： アッサム州ハジョ・カマキャ・シヴァサーガル・ルドラサーガル、トリプラ州ウダイプルなど、煉瓦積み・モルタル塗りで四隅の垂れたベンガル風屋根様式を踏襲、脇に大規模な人工池を掘削しているのは東南アジアと共通。 シヴァサーガル郊外のチャライデオには円丘古墳群が集まる「王家の谷」がある。

▶城塞・宮殿： シッキム州古都ペリン、シヴァサーガル、カングラ（インパール）、アガルタラなど。 堀で囲む東南アジア風の平面プランが多い。

▶戦跡： インパール・コヒマを中心に、英国による慰霊碑・兵士墓地・空軍滑走路跡が散在（年配の村民から戦時中の体験も聴ける）。 マニプール州ロクパチンのレッドヒル（日本政府建立のインド平和記念碑と最近開設した平和資料館）、モイラン（チャンドラ・ボースとインド国民軍記念館・戦争博物館）、キサマ戦争博物館など。

インパールに戦跡巡り専門の旅行会社あり。

6. 東北インドと日本の関係

アッサムはダージリンと共に世界的なお茶の産地でお馴染だが、日本人にとって最初で直接の遭遇は、1944年ビルマ方面第15軍が英軍拠点インパール・コヒマ奪取を目指しチンドウインを渡河・進攻したインパール作戦。 チャンドラ・ボース率いるインド国民軍も従軍したが、雨季入りで兵站線も尽きて撤退、数万の兵士が散華した史上最大の陸戦。 文化的には、ヒマラヤ東麓の東亜半月弧を核とした「照葉樹林帯文化」の源流地域で、西日本とも生活文化を共有する日本文化の源流の一つ。具体的には焼畑農耕、陸稲、餅米・赤米・干飯、茶、根菜類、干魚、発酵食品（味噌・醤油・納豆）、醸造酒、堅果類の灰汁抜き、お歯黒、刺青、絹（蚕）、竹細工・漆器、高床・竹編壁・萱葺の木造家屋、千木（東北インド特産の牛ミトゥンの角をデザイン）・鰹木など。 西南シルクロード（雲南ルート）およびインド洋モルディブ諸島原産の宝貝 Cowry の交易路でもあった。

インパール作戦によるインド独立支援、戦後の日本政府 ODA・JICA による資金的人的支援もあって、対日感情は極めて良好。 近年、インド政府の Act East Policy は、東南・東アジアとの連携・融和・安全保障の強化を促し、東北インドは東南アジアへの玄関口として地政学上の重要性が増大。 同時に、日本政府は、特別戦略的グローバル・パートナーシップに基づき「主権と国際法が尊重され自由で開かれた繁栄するインド・太平洋地域」の重要性を共有し、インフラ構築・人的交流の様々なプロジェクト取組みへ積極的に支援している。 このような日印協力の進展を睨みながら、既に学識研究者・専門家が取組んでいる個々のテ―マに加えて、新たに個人・団体が事業機会・共同案件を求めて参入しつつある（一次産品の活性化・広域ツーリズム・介護人材の確保など）。前提として自然環境・社会・歴史・文化的背景の理解が必須で、特に比較対照による包括的整理が効果的。 例えば、伝統（継続）と革新（変化）、共通（類似）と特異（相違）、アイデンティティー（独自）と融合（交流）、メインランド（中央）とボーダーランド（周縁）など対比項目で検証するとよい。

7.　地域交流の深化に向けて

2018年、筆者はマニプール州において二つの交流会に出席する機会を得た。即ち、2月モトブンでの「North-East India and Japan Cultural Symposium － The Way Ahead」および10月チュラチャンプルでの「International Seminar on India’s Act East Policy with Reference to Manipur」である。 日本以外にミャンマー・タイ・アッサム州からも参加あり、学識研究者・起業家の発表は多岐に亘った。 討議を通じて、特に地元社会、州政府および中央政府間の認識ギャップ、更には諸政策への地元民の反発ないしは被害者的意識も垣間見えた。 最近の地域課題として、中国の「一帯一路」構想への対応、中国軍のブータン国境ドクラム進出の緊張、ミャンマー・ロヒンギャ難民の救済、更にはバングラデシュ・ネパールからの不法移民の流入とアッサム州のムスリム人口増加など、安全保障・経済・社会・宗教の問題が錯綜する。 依存心に流されずSelf Helpの精神の下、「衆知を集め、物心一如、共存共栄する」社会を築いていくために、「真の地域交流会」の継続開催が地域連携の起点として有効と考える。 即ち、日本・東北インド各州は勿論、周辺5ヵ国・西ベンガル州からの参加も得て、広く協賛・支援団体を募り、地域課題の抽出・対策・草の根的取組み・産官学一体の人的交流とノウハウ・スキルの交換を循環させる仕掛けを思案する昨今である。

3.　日印協会は国際文化会館と戦略的パートナーシップに合意し覚書を締結

Establishment of a Strategic Partnership between JIA & I-House

日印協会理事長　平林博

公益財団法人・日印協会（所在地は中央区日本橋茅場町）と公益財団法人・国際文化会館（所在地は港区六本木）は日印間の関係全般にわたって協力を推進することに合意し、8月22日、国際文化会館において、平林 博日印協会理事長と近藤正晃ジェームズ国際文化会館理事長との間で覚書に署名しました。

覚書を交換した近藤国際文化会館理事長と日印協会平林理事長
後列右から丸山国際文化会館常勤理事、双方の理事を務める竹中千春立教大学教授、笹田日印協会常務理事、西本事務局長

弊協会は、1903年大隈重信元首相や澁澤栄一などによる創立以来、独立前の英領インド時代から今日大国になるまでのインドと日本との関係で一貫して貢献して参りました。その長い歴史を通して、日印双方の政界、経済界、文化学術界などから高く評価されてきました。

国際文化会館は、1952年に日米の各分野のリーダーたちによって創設され、わが国と米国をはじめとする国際的な知的、文化的交流に貢献してきた本邦でトップクラスの文化･学術交流機関です。その国際的な知名度と影響力は大きく、内外で高く評価されております。

また、国際文化会館はインドとの関係では、これまでも多くの文化・知的交流事業を行ってきましたが、インドにおいて政治、経済、文化・知的リーダーたちが集まって事業を行っているインド国際センター（Indian International Center,　IIC）は、国際文化会館をモデルに設立されたものです。IICは、1960年に皇太子・同妃殿下として新婚旅行をかねて訪印された現在の上皇ご夫妻が定礎式を行われ、現在でもその礎石があります。

今回の協力覚書の締結を機に、弊協会と国際文化会館は、日印間の要人の往来、インドに関するセミナーやシンポジュームの開催などの知的交流、各種文化行事への主催や支援などにつき、協力を拡大し深化させていくことにしております。

双方は、法人会員や個人会員の会費や各種のご協力により活動しておりますが、これを機に、皆様からの一層のご支援ご鞭撻をいただきたく、お願い申し上げる次第です。

4. G20 大阪サミット学生ボランティア体験記
Volunteer Experience at G20 Osaka Summit

大阪大学文学部人文学科一年　国際問題研究会　ラワンチャイクン　茉莉　個人会員

6 月 27 日、モディ首相による講演会が行われた兵庫公館

令和元年 6 月 28，29 日に開催された G20 大阪サミットには、ナレンドラ・モディ首相を始め、インド政府・メディア関係者が来日され、私たち国際問題研究会（SWADOM）は関係者のサポートのために、インド総領事館より学生ボランティアとして活動の機会をいただきました。

本ボランティア活動は、昨年度の在大阪インド総領事館との打ち合わせに始まり、6 月 23 日の関係者等への挨拶、会場となったインテックス大阪や首相ご来訪予定場所の調査への同行などの準備を経て、G20 二日目の 29 日まで、大阪大学、関西学院大学の学生を中心とした計 21 名で行いました。学生ははじめ 3 チームに分担されていたインド関係者に合わせて、SPG（セキュリティ担当）、Media（報道担当）、Protocols（外交儀礼担当）に分かれました。主に通訳・翻訳や関係者の観光の付き添い、関西空港でのインド関係者の出迎えを始めとして、それぞれの担当で警察との連携や会場のセキュリティ確認、ニュース作りの支援、外交手順の確認などを担いました。そして後半 4 日間は、学生同士の情報共有の正確さや各々の能力の高さが評価されて、Transportation も新たに任せられ、配車数・配車状況を随時把握して総領事館からドライバーへの伝達事項を代理伝達する役割も受け持ちました。また待機場所も、ホテルロビーからインド関係者が働いている各コントロールルームへ移動し、学生が中心となって動く事が多くなりました。しかしそれに伴って、インテックス大阪や首相がご講演なさった兵庫公館など、遠くへ足を運ぶ機会や急な変更といったハプニングの頻度も増えていき、参加学生のほとんどは毎日 12 時間以上活動していました。そのような状況にも関わらず、当日が近づくにつれて参加学生全員が、G20 の成功と日印のより良い関係の構築を願って、楽しみながら務めていたように思います。

Media 担当であった私自身は、インドの DD News テレビ局やラジオ局の方々の、G20 に関する報道や関西の魅力発信に関する現地取材に同行したり、インドやモディ首相に関する G20 の日本の記事をインド側に提供したりしました。初日は聞き慣れていない英語自体と他の参加学生の能力の高さにただただ圧倒され、未熟な自分が 1 週間ボランティアとしての役目を果たしきれるか不安を感じました。しかし、「為せば成る」精神のもと、英語に不慣れなことを隠さずに積極的にサポートに徹すると、徐々に聞き取れる・話せる英語が増えてきて、少しではありますが語学力が進歩したと実感することができました。また、少なくはないトラブルや急な変更に冷静な判断、柔軟な対応で当たることが外交の舞台裏で求められることを知り、どのようなスキルが自分には足りないのか、そしてそのスキルを少しでも身につけるためにはこれからいつ何をしていくべきなのか、を自覚し、考える良い機会となりました。

今回ボランティアに参加した学生たち
（前列右端が筆者）

去る８月、SWADOM に所属する学生５名で、駐日インド大使館、日印協会を表敬訪問しました。そこでサンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド大使、シッダールト・シンヴィヴェーカナンダ文化センター所長、平林博日印協会理事長に、G20 学生ボランティア活動の報告をし、各氏からはそれぞれが現在学んでいる分野や将来の道について、ご教示いただきました。お忙しいにも関わらず、わたしたち学生を温かく迎え、貴重なお時間をさいていただいたことに、この場をかりて改めて感謝を申し上げます。

駐日インド・ヴァルマ大使（中央）、
シッダールト・シン VCC センター所長（右端）と

日印協会　平林理事長を囲んで

今回、G20 大阪サミットという大舞台に、インド政府の学生ボランティアとして携わることができたことは、参加学生全員にとって、何事にも代えがたい大変貴重な経験となりました。これも、常日頃よりご指導いただいている日印協会、そして SWADOM 始動当初から日印協会やインド総領事館とより良い関係を築いてこられた先輩方の温かいご支援によるものと思います。今一度、G20 学生ボランティア参加学生を代表して、ご指導・ご支援くださった全ての方々に謹んで御礼申し上げます。

5. インドニュース(2019 年 7-8 月)
News from India

◇ インドニュース（2019 年 7 月） ◇

1. 内政

【連邦政府/連邦議会】

7 月 5 日：シタラマン財務大臣は，2019 年度本予算案を下院に提出し，財政演説を行った。

7 月 18 日：下院議会は，2019 年度本予算案に修正を加えた上で可決した。

7 月 25 日：ジョシ議会大臣は，下院議会で，予算国会会期を 8 月 7 日まで延長する旨発表した。

【コングレス党】

7 月 3 日：ラーフル・ガンディー総裁は，5 月の連邦下院総選挙の結果に責任を取るとして，正式に総裁職を辞任した。

【ジャンム・カシミール州】

7 月 8：印政府は，国連人権高等弁務官事務所（ＯＨＣＨＲ）が発行したＪＫ州状況評価のレポートを，越境テロ等を考慮していないとして強く批判した。

【グジャラート州】

7 月 5 日：上院議員補欠選挙（2 議席）が実施され，ジャイシャンカル外務大臣及びジュガル・タコールＢＪＰ幹部が当選した。

【アッサム州】

7 月 17 日：シャー内務大臣は，上院議会において，国民登録簿（ＮＲＣ）によって全不法移民を特定し，国外へ追放すると述べた。

7 月 23 日：最高裁は，国民登録簿（ＮＲＣ）最終版発行期限を一か月間延期し，8 月 31 日とした。

2. 経済

【インド経済（2019 年度本予算案）】

7 月 5 日：シタラマン財務大臣は，2019 年度本予算案を国会に提出し，財政演説を行った。

メモ：2019 年度本予算案のポイント

（1）2019 年度予算は，2024 年度における 5 兆ドル経済の実現に向けた今後 10 年のビジョンを示す予算。ビジョン実現のポイントとして，チーム・インディアによる「最小の政府で最大のガバナンス」をはじめ，環境やデジタル宇宙，インフラなど 10 のポイントを列挙。

（2）投資を中心とした経済成長（investment driven economic growth）を目指し，歳出拡大を抑制しつつ，構造政策を重視し、財政赤字比率を低減させる方向性を打ち出すなど、第二次モディ政権においても財政規律を重視する姿勢を鮮明にした。

（3）税制改正では法人税率の 25%への引下げを推進しつつ富裕層への増税等を打ち出し、主に直接税改革を志向。

（4）歳出面では，農村，インフラ開発や社会福祉分野について引き続き重視。

（5）予算措置以外の経済政策として，特に長年の課題となっている労働法改革などの構造改革に取り組む姿勢

を示した。

3. 外交

【印ＵＡＥ関係】
7 月 7 日－9 日：アブダッラー・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン・ＵＡＥ外相がインドを訪問した。同外相は，ジャイシャンカル印外相と会談し，安全保障，エネルギー等の分野での協力促進について議論した。また，同外相は，モディ首相を表敬し，地域の平和，繁栄，安定，そして両国民の相互利益のために協力を進めるビジョンを表明した。モディ首相は経済，交易，観光，人的交流における二国間協力をさらに推し進める旨述べた。

【印イスラエル関係】
7 月 9 日：印メディアは，ネタニヤフ・イスラエル首相が 9 月 9 日に訪印する可能性を報じた。

【ジャイシャンカル外相の訪英】
7 月 9 日－11 日：ジャイシャンカル外相はコモンウェルス外相会合出席のためロンドンを訪問した。同外相は，ＳＤＧｓや気候変動に関連する技術協力，島国の発展支援等に関する印政府の貢献について述べた。現地滞在中，ジャイシャンカル外相は，豪外相及びバングラデシュ外相と会談した。

【印中関係】
7 月 14 日：印メディアは 10 月 12 日にモディ首相と習近平・中国国家主席の非公式首脳会談がバラナシにて行われる予定と報じた。また，併せて 9 月にジャイシャンカル外相が印中ハイレベル人的交流に関するメカニズムの協議に参加するため北京を訪問する予定とも報じた。

【印パキスタン関係】
7 月 14 日：カルタールプール・サーヒブ回廊に関する第 2 回印パ協議が開催された。

【印露関係】
7 月 19 日：印メディアは，9 月初旬の東方経済フォーラムに際してモディ首相が訪露した際に，印露間で防衛分野における相互物流支援協定が締結される見込みである旨報じた。

【印米関係】
7 月 20 日：印メディアは貿易，関税等の二国間の課題を解決するために米印両政府は，11 月もしくは 2020 年 1 月のトランプ大統領訪印を模索している旨報じた。

7 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，カシミール問題に米国が仲介する用意があるというトランプ大統領の発言に対し，国会において，モディ首相がトランプ大統領に仲裁を依頼した事実はないと否定し，カシミール問題は印パ二国間で解決されるべき旨強調した。

4. 日印関係

7 月 25 日：インドのデリーにおいて，インド高速鉄道に関する第 10 回合同委員会が開催された。

今月の注目点：インド高速鉄道に関する第 10 回合同委員会の開催

25 日，インドのデリーにおいて，インド高速鉄道に関する第 10 回合同委員会が開催されました。

今回の会合には，日本側から，和泉洋人内閣総理大臣補佐官（日本側の共同議長）を団長として，関係部局（外務省，財務省，経済産業省，国土交通省，JICA 等）の幹部が参加し，インド側から，ラジブ・クマール行政委員会副委員長（Mr. Rajiv Kumar, Vice-Chairman, NITI（National Institution for Transforming India）Aayog（Committee））

（インド側の共同議長）を団長として，鉄道省，外務省等の関係各省及びインド高速鉄道公社の幹部が参加しました。

今回の会合では，プロジェクトの円滑な推進に向け，事業スケジュール等について議論するとともに，駅周辺整備，人材育成などムンバイ・アーメダバード間高速鉄道計画の進捗が確認されました。

日本政府としては，ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道への新幹線システムの導入の実現に向け，引き続きインド政府と緊密に協力し，取り組んでいく考えです。

◇ インドニュース（2019 年 8 月） ◇

1. 内政

【連邦政府／連邦議会】

8 月 2 日：上院議会は，非合法活動（防止）改正法（The Unlawful Activities (Prevention) Amendment Bill,2019）を可決した。

8 月 6 日：下院議会における午前中の議事の冒頭，ビルラ下院議長は，広島及び長崎の原爆犠牲者を追悼する発言を行い，その後，出席している全下院議員が起立し黙祷が行われた。

8 月 6 日：下院議会における予算国会は閉会した。今国会で 35 の法案が可決された。

8 月 6 日：スワラージ前外務大臣（67 歳）は，デリー市内の病院で逝去した。

8 月 15 日：モディ首相は，独立 72 周年となる（73 回目の）独立記念日に際し，デリーのレッド・フォートにおいて演説を行った。水の保全にかかる広範な分野への 3．5 兆ルピーの投資，陸海空 3 軍を統括する統合参謀長（ＣＤＳ)ポストの新設，人口の抑制の必要性等に言及した。（→今月の注目点）

8 月 21 日：モディ政権は，ラジーヴ・ゴウダ内閣官房次官（Cabinet Secretary）（8 月 30 日付）及びアジャイ・クマール国防次官（Defence Secretary）（8 月 24 日付）を指命した。

8 月 21 日：チダンバラム元財務・内務大臣は，贈収賄容疑で逮捕された。

8 月 24 日：ジャイトリー前財務大臣（66 歳）は，デリー市内の病院で逝去した。

【ジャンム・カシミール州】

8 月 4 日：州治安省局は，アブドゥラー元州首相及びムフティ前州首相を自宅軟禁した。

8 月 5 日：モディ内閣の決定を受けて、ジャンム・カシミール州に独自の憲法を認めていた共和国憲法第 370 条を無効とする大統領令が発出された。上院議会は，これに従って、ＪＫ州をジャンム・カシミール地方とラダック地方の 2 つの連邦直轄領として再編成する法案を可決した。6 日，下院議会は，同法案を可決した。これに対しては、JK 州から強い反対の声が上がったほか、パキスタンからも抗議が行われたが、JK 州を他の州並みに扱うこの決定は正式のものとなった。

8 月 14 日：モディ首相は，インタビューの中で，ＪＫ地方及びラダック地方が住民の望みどおりに発展することを保証したいと述べた。

8 月 14 日：コヴィンド大統領は，独立記念日前日の演説の中で，ＪＫ地方及びラダック地方の国民は，最近の変化により，他の国民と同様の権利を享受することができ，計り知れない便益を受けるだろうと述べた。

2. 経済

【2019 年度第 3 回金融政策決定会合（利下げ）)

8 月 5 日～7 日：インド準備銀行（ＲＢＩ）は、金融政策委員会（ＭＰＣ）会合を開催し、7 日にその結果を公表した。

メモ：ＭＰＣステートメントのポイント

(1) 政策金利（レポ・レート）を 5.75%から 5.40%へ引下げ。

(2) 金融政策に対するスタンスを「緩和的（accommodative）」で維持。

(3) インフレ率の見通し

インフレ見通しは、2019 年度第 2 四半期は 3.1%、2019 年度下半期は 3. 5～3.7%、2020 年度第一四半期は 3.6%（注：前回の見通しは、2019 年度上半期は 3.0～3.1%、2019 年度下半期は 3.4%～3.7%。）。

(4) 経済成長率の見通し（引下げ）

2019 年度の実質ＧＤＰ成長率は 6.9%（同年度前半は 5.8～6.6%、同年度後半は 7.3～7.5%）を見込む（注：前回の 2019 年度成長率見通しは 7.0%）。

3. 外交

【印中関係】

8 月 12 日：ジャイシャンカル外相が外相就任後初めて訪中し、第二回文化・人物交流ハイレベルメカニズム会合に出席したほか、王岐山国家副主席及び王毅外交部長と会談を行った。

【印パキスタン関係】

8 月 8 日：パキスタンが印政府の憲法 370 条無効化を受けて、印との二国間関係に関して外交関係の格下げを含む特定の一方的措置をとる決定をしたことを受けて、8 日、印外務省は声明を発表し、パキスタンが事実に基づかない理由を根拠として一方的措置を決定したことは遺憾であり、通常の外交チャンネルが維持されるよう検討を要請する、と述べた。

【印ブータン関係】

8 月 17 日－18 日：モディ首相はブータンを訪問し、ワンチュック第 4 代国王拝謁及びツェリン首相との会談を行った。今次訪問は二国間の定期的な要人往来の伝統を継続するものであり、経済・開発分野における協力、水力発電にかかる協力、人的交流を含む二国間のパートナーシップを更に強化・多様化し、地域の問題やその他共有の関心事項に関する見方を共有する機会となった。

【印露関係】

8 月 21 日：ドヴァル国家安全保障担当補佐官は 9 月のウラジオストックにおける東方経済フォーラムへのモディ首相出席及び第 20 回年次印露首脳会談の準備のため訪露した。印露は「主権・領土保全と第三国による不干渉の原則」への相互支持を改めて強調した。この点をもって、当地メディアは露がカシミール情勢にかかる印政府の立場を支持した旨報じた。

8 月 27 日－28 日：ジャイシャンカル外相はモスクワを訪問した。同訪問中，ジャイシャンカル外相はラブロフ露外相等と会談し，モディ首相の訪露等について議論した。

【印仏関係】

8 月 22 日－23 日：G7 サミットのアウトリーチ会合（G7 以外の主要招待国との会合）に招待されて訪仏中のモディ首相はマクロン仏首相と会談した。両首脳は共同声明を発表した。

【印英関係】
8 月 22 日－23 日：モディ首相は，ジョンソン英首相とも会談した。両首脳は貿易，投資，安保・防衛，科学技術，教育等の分野での二国間協力強化について議論した。

【印ＵＡＥ関係】
8 月 23 日－24 日：モディ首相はＵＡＥを訪問した。同訪問中，モディ首相はＵＡＥ皇太子と会談し，二国間関係，地域・国際情勢について意見交換を行った。モディ首相はＵＡＥの最高勲章を授与された。

【印バーレーン関係】
8 月 24 日－25 日：モディ首相はバーレーンを訪問した。同訪問中，両国は宇宙研究，太陽光同盟，文化交流の 3 つの文書に合意し，両国首脳は共同声明を発表した。

【印ハンガリー関係】
8 月 25 日－27 日：ジャイシャンカル外相はハンガリーを訪問した。同訪問中，ジャイシャンカル外相はハンガリー外相と会談を行い，V4 諸国（ハンガリーのヴィシェグラードで協力枠組みを発足したチェコ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキア 4 カ国）との協力を含めた二国間及び多国間の幅広い協力の可能性について議論した

【印ポーランド関係】
8 月 28 日－29 日：ジャイシャンカル外相はポーランドを訪問した。同訪問中，ジャイシャンカル外相はモラヴィエッキ・ポーランド首相を表敬し，地域情勢，政治，経済の課題につき意見交換を行った。また，両国外相は共同声明を発表した。

4. 日印関係

【日印外相会談】
8 月 1 日：午後 2 時 10 分頃から約 20 分間，ASEAN 関連外相会議に出席中の河野太郎外務大臣は，ジャイシャンカル・インド外務大臣と日印外相会談を行った。概要は以下のとおり。
・冒頭，河野大臣より，G20 大阪サミットの際にお会いして以来，間を置かず再会できうれしく思う，特別戦略的グローバル・パートナーシップの下，日印間で協力して進めていく課題は多く，引き続き緊密にジャイシャンカル外相と連携していきたいと述べた。
・両外相は，次回の安倍総理大臣の訪印に向けて協力を促進していくことで一致した。また，地域情勢につき意見交換し，引き続き連携していくことを確認した。

今月の注目点：独立記念日に際してのモディ首相の演説（ポイント）

- モディ首相にとって通算 6 回目，第 2 次政権樹立後初となる独立記念日首相演説。冒頭の被災地へのメッセージに続き，政権樹立から 10 週間での成果を強調し，経済，インフラ，安全保障，水資源，衛生等の各分野での決定や今後の方針を強調するものとなった。
- トリプル・タラーク（夫が「タラーク」と 3 度唱えれば離婚が成立するというイスラム教の慣習法）の禁止を法制化したことを、ムスリム女性の権利を守る成果として強調。
- 憲法第 370 条，35 条Ａの無効化は，国民の願いであり，ジャンム・カシミールの安定，発展にとって必要であるとして第二次政権の大きな成果として強調。
- 全土に一つの憲法が適用されること，ＧＳＴ導入による税制の統一，電力網の統一等による一つの国家としてのインドを強調。統一選挙に関する議論に言及。
- 水分野に重点を置くことを強調。全家庭に上水道を配備する計画，水の保全にかかる広範な分野への 3.5 兆ルピーを投資に言及。
- 人口の抑制の必要性に言及。
- 汚職と血縁主義の排除に向けた取り組みに言及。

- 不必要な法規の廃止によるビジネス環境，生活環境改善の実績に言及。ビジネスのしやすさで世界トップ 5 に入るという目標に言及。
- 各種近代的なインフラ建設のための 100 兆ルピー投資計画を強調。
- 5 兆ドル規模経済を目指すことには，困難ではあるが実現可能であると強調。農民の所得倍増，ブルー・エコノミーの発展，農作物・手工芸品の輸出拡大，観光の発展とこれらによる雇用拡大の可能性に言及。
- インドの政治的安定性に対する他国の評価，信頼を強調。インド経済の基盤の強さ及びインフレ制御と経済成長の両立を強調。
- テロ組織，テロ支援組織との戦いに言及。
- アフガニスタン独立 100 周年に対する祝辞。
- 陸海空 3 軍を統括する統合参謀長（CDS:Chief of Defence Staff)ポストの新設を発表。
- ガンディー生誕 150 周年を，使い捨てプラスティック使用からの脱却の第一歩とすることに言及。
- インド製品の使用，電子決済の使用・拡大，国内旅行，化学肥料使用の抑制を推奨。
- 宇宙，科学技術，スポーツの分野でのインド国民，若者の活躍に言及。

6. イベント紹介
Japan-India Events

◇ 最近のイベント ◇

◆ 8 月 2 日（金）に日印協会主催＜第 45 回　様々なインド＞を開催いたしました！

今回の「様々なインド」では「月刊インド」6 月号で記事を書いてくださったアーユルヴェーダのスクールを開講している、日印協会会員でもある文分千恵様に「アーユルヴェーダは人間の健康と幸福をもたらす人類の英知」をお話して頂きました。夕方になっても日中の暑さが収まらない中、事務局員を含めて 26 名が参加致しました。

古代インドから伝えられてきた生命の科学アーユルヴェーダ。人間は 4 つ、体、心、感覚器官、そして魂（意識・エネルギー）のバランスが崩れた時に不調になったり、病気になるとの事。

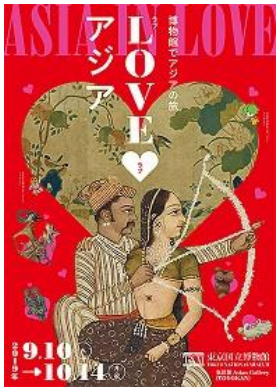
その後、一人一人に生まれながらの体質（ドーシャ）があり、その体質のよってバランスの整え方が違うので、配られた資料の 22 の質問に各自答えて、自分の体質を確認しました。ドーシャにはヴァータ（空、風）、ピッタ（火）、カファ（水、地）がありますが、今回の講習会に出席された方は、消化力も強く食欲旺盛で熱をためやすい「ピッタ」が半分位と一番多かったです。

文分先生が参加者の方に簡単な実技ができるようにと、オイルと綿棒を持参されましたが、時間が足りず数分しか実技ができなかったのが残念でした。参加者からも多くの質問があり、世界保健機関(WHO)でも有用性が認められているアーユルヴェーダの関心が高まっているのを感じた講演会でした。文分先生に教えて頂いた眠りの質を高めるゴマ油を使った頭部マッサージは私も家で試しております。文分先生、暑い中、講演して頂きありがとうございました。　　**（日印協会　山本真里枝）**

◇　今後のイベント　◇

◆　東京国立博物館「博物館でアジアの旅　～LOVE♡アジア～」

今秋の東博でのアジアの旅は、「愛」がテーマ。愛を題材とした多彩な作品をご紹介しながら、アジア各地の人々がいにしえより愛をどのようにとらえ、表現してきたのかを探ります。みなさんも一緒に東洋館でいろいろな愛のかたちを探してみませんか？その中にはインドの細密画も9件展示されています。



また、東洋館には南インドで発掘されたバイラヴァ神の石像が展示されています。これはインドが大阪万博のインド館に展示したもので万博後に日印協会に贈呈されましたが、今では協会が東京国立博物館に寄託しています。

会期：開催中 ～ 2019年10月14日（月）
「インド細密画　男女の愛」は10月20日（日）まで
場所：東京国立博物館　東洋館 13室
JR上野駅公園口または鶯谷駅南口より徒歩10分
観覧料：一般620円，大学生410円
※高校生以下および満70歳以上の方は無料

◆　ナマステ・インディア2019開催のお知らせと日印協会の講演会のご案内

インドのワインや紅茶、高級サリーからリーズナブルなものまで豊富な物販やインド料理も楽しむことができ、ヨーガやアーユルヴェーダ、メヘンディ、インド占星術などインドを肌で体験できるブースもあります。インド文化を担う国内外の舞踊家、音楽家がステージを飾り、会場内のセミナーハウスでは、インドに関する講演を無料で聞く事ができます。

昨年のナマステ・インディアのステージの様子

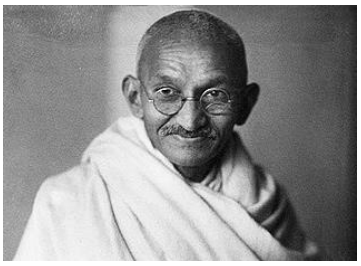
日時：　9月28日（土）10:00AM ～ 8:00PM
　　9月29日（日）10:00AM ～ 7:30PM
会場：東京都代々木公園イベント広場
JR山手線・原宿駅（徒歩8分）、
小田急線・代々木八幡駅（徒歩8分）
東京メトロ千代田線・代々木公園駅（徒歩5分）
又は明治神宮前駅（徒歩5分）
入場：無料

それに合わせ、日印協会ではセミナーハウスにて、下記講演会を開催致します。
皆様、お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。同封チラシもご覧ください。

9月28日（土）13:00～14:00
『魅惑のインド世界遺産　その歴史的、宗教的、文化的背景』
講師：平林博
公益財団法人日印協会 理事長・元駐インド大使・元駐フランス大使

9月29日（日）13:00～14:00
『観光ガイドに載っていないインパールとその周辺の最新情報』
講師：山田　真美
作家/博士（人文科学）
インド工科大学(IIT)ハイデラバード校教養学部客員准教授
日印芸術研究所言語センター長・公益財団法人日印協会理事

◆　10 月 2 日　インド大使館で「マハトマ・ガンディー生誕 150 年祭」を開催します



インド大使館では毎年ガンディーの誕生日に生誕祭を開催していますが、今年は特別にマハトマ・ガンディー生誕 150 年祭を開催します。

特別講演は、立教大学・竹中千春教授の「ガンディー　平和を紡ぐ人」と、ガンディーの創設した大学で博士号を取得した栗原香織さんの「ガンディーの教育思想とグジャラート・ヴィディヤピート」です。後半は芸術プログラムでお楽しみください。最後にガンディーがその歌と共に歩んだお気に入りのバジャンを会場のみなさんと一緒に歌います。

現代に生きる私達にも大きな示唆を与え続けるガンディーの生き方に触れ、記念日を一緒にお祝いしましょう！

日時：2019 年 10 月 2 日（水）　開場 13:30　開演 14:00　終演 17:00

場所：インド大使館　VCC 講堂　入場：無料（要事前申込）

参加を希望される方はインド大使館ヴィヴェーカナンダ文化センターのメールアドレス vcc.tokyo@mea.gov.in 宛に氏名・所属・国籍・開催日（10 月 2 日）をご連絡ください。

主催：インド大使館

共催：（公財）日印協会、日印文化交流ネットワーク、ディスカバーインディアクラブ

協力：（一社）日印女子フォーラム

◆　10 月 3 日『インド人弁護士が勧めるインドビジネスの鍵』インド法務ビジネスセミナーのご案内

インド・チェンナイベースの法律事務所（EGCL マネジメントサービス）が主催する、『インド人弁護士が勧めるインドビジネスの鍵』セミナーの開催案内が、同社よりありましたので、ご案内致します。

同社は、法律事務所ではありますが、インドでの日本企業の経営運営のコンサルタント業務で長く活動しており、法的かつ経営的視点でのアドバイザーをされております。今回のセミナーは、法務的な面での一般知識ではなく、日本企業がインドにおいて具体的にどのような活動をすべきかのコツを、実務的に平易に解説するとの方針です。講師をする Mr. B・Elango は日印協会の会員であり、日印協会は本セミナーを後援しております。

日時 2019 年 10 月 3 日(木) 14:00~16:00

場所 法曹会館 東京都千代田区霞が関 1-1-1 高砂の間（電話 03-3581-2146）

詳しくは EGCL マネジメントサービス　Mr. B Elango までメール（egclmanage@gmail.com）でお問い合わせください。すべて日本語にて対応可能です。

◆　10 月 5 日　第 8 回ドゥルガ・プジャが東京都江東区文化センターで開催されます

ドゥルガ・プジャは、インドのベンガル地方で最大に祝われるお祭りです。

日時：2019 年 10 月 5 日（土）　会場：江東区文化センター

入場料：13 歳以上　3,000 円（ランチ、飲み物、福引代込み）

6 歳～12 歳　1,000 円（ランチのみ）

主催：India(Bengal)Cultural Association Japan

問い合わせ：メール admin@ibcaj.org　電話 090-9847-2202

詳しくは封入チラシをご覧ください。

◆　10 月 5 日　東京ディワリフェスタ西葛西 2019 が開催されます

日程：2019 年 10 月 5 日(土)　時間：10:00～17:00

場所：江戸川区・西葛西新田 6 号公園　（東京メトロ東西線「西葛西駅」徒歩 10 分）

入場：無料

◆　インド映画『マントー』（MANTO）上映会

インド・パキスタン分離独立の動乱期を生きた作家マントーの生涯を映画化

日時：2019 年 10 月 11 日（金）18:45~20:45　(開場 18:15)

会場：公益財団法人 早稲田奉仕園 スコットホール

地下鉄東西線「早稲田駅」出口②より徒歩約 5 分

〒169-8616 東京都新宿区西早稲田 2-3-1　電話 03-3205-5403

入場無料 200 名(当日先着順となります)

共催：早稲田奉仕園、東京外国語大学南アジア研究センター(FINDAS)

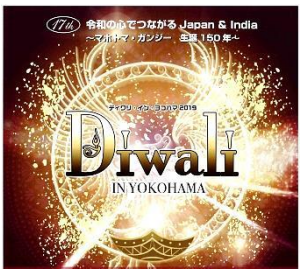
在日インド商工協会（ICIJ）

ホテルマネージメントインターナショナル株式会社（HMI）

後援：日印協会（JIA）　　協力　：東京外国語大学 TUFSCinema、藤井美佳(字幕翻訳家)

◆　10 月 26 日 – 27 日にディワリ・イン・ヨコハマ 2019 が開催されます

ディワリはインドのお正月。今年のテーマは「令和の心でつながる Japan&India」



日程：10 月 26 日(土)・27 日（日）時間：10:00～19:00 雨天決行

会 場：横浜市 山下公園 おまつり会場

神奈川県横浜市中区山下町

みなとみらい線日本大通り駅・元町中華街駅 徒歩 4 分

入 場：無料

詳しくは封入チラシをご覧ください。

◆　11 月 16 日インド古典舞踊公演「美しきブッダと女たち～仏画に魅せられ舞い踊る～」

インド舞踊と仏画のコラボレーションで綴るブッダと女たちの物語

詳しくは封入チラシをご覧ください。

日時：11 月 16 日（土）18 時半開演　　場所：座高円寺 2

主催：ケララ企画

後援：杉並区　公益財団法人日印協会　応援：インド大使館

出演：丸橋広実　丸橋広実モヒニアッタム舞踊団　松尾翔太郎

仏画作家：盧万喜 Ro Mani

料金：前売　4500 円　当日　5000 円　学割　3500 円

※日印協会会員は前売り券を 500 円割引で購入できます。

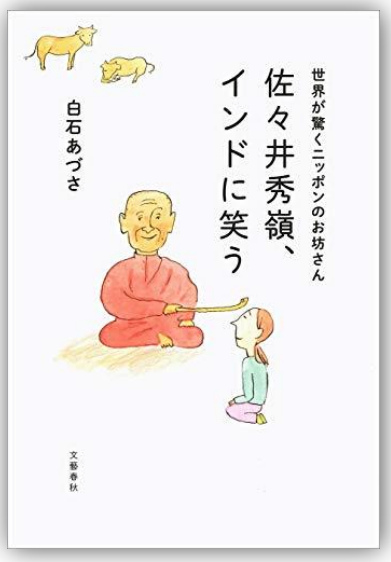
申し込みはメール keralakikaku@gmail.com 又はお電話 080-3013-0924 で日印協会会員とお伝えください。

7. 新刊書紹介
Books Review

§『世界が驚くニッポンのお坊さん　佐々井秀嶺、インドに笑う』

著者：白石あづさ　　出版社：文芸春秋

価格：1,750 円＋税　　ISBN 978-4-16-16391036-9



「インドで、カースト制度の最下層とされるダリット（俗にアンタッチャブル）の間でヒンドゥー教に由来するカースト制度の束縛から逃れるために差別のない仏教に改宗する人々が今、増えている。その中心的役割を果たしてきたのが、佐々井秀嶺だ」ってこと、私は全く本を読むまで知らなかったです。

「インド仏教の現状を同じ仏教徒である日本人に知ってもらいたい」という佐々井さんの願いは私にもしっかり伝わりました。

本には佐々井 実（みのる、佐々井さんの本名）が「佐々井秀嶺」になり、さらにインド国籍を取得してアーリャ・ナーガルジュナとして活躍している、波乱万丈の人生が書かれています。

色情因縁に悩み、3 度の自殺未遂、高尾山からタイ、そしてインド・ナグプールへ。龍樹菩薩のお告げに従い、インドで一生仏教布教に専念すると決めてからは、ブッダガヤ闘争やマンセル遺跡の発掘など、インド各地で単身苦闘してきた 80 年を超えた激動人生は、読み始めたら止まりません。（**日印協会　山本真里枝**）

◇ 協会事務局からのお願い ◇

個人会員の皆様には、「個人会員年会費納入のお願い」をお送りしております。まだお振込みがお済みでない方はお早目の納入をお願い申し上げます。

公益財団法人である当協会の会費は、税法上の優遇措置の対象となり、所得税の確定申告時に「寄附金控除」の適用を受けることが出来ます。
ご希望の方には領収証を発行いたしますので、事務局へお早めにお申し出ください。

8. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回 10 月号の発送は、2019 年 10 月 18 日(金)を予定しております。

会員は発刊日にお手伝いをしていただければ、月刊インドにチラシを無料で封入することが出来ます。チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

＜編集後記＞

今月号はインド通旅行者もあまり行かないインド北東部（東北部）についての記事を二つ取り上げました。それに合わせて表紙も、ミャンマーと国境を接するマニプール州の伝統舞踊「マニプリ」とインド・サイの最大生息地である、アッサム州の世界自然遺産「カジランガ国立公園」にしました。読者の方に北東部の魅力が伝われば幸いです。

写真のマニプリ舞踊団はマニプール州政府より 9 月 28 日・29 日開催のナマステ・インディア（於、渋谷区代々木公園イベント広場）に派遣され踊りを披露する予定です。ナマステ・インディアではセミナーハウスで日印協会主催の講演会も開催されます。生のマニプリダンスを観たあとは講演にもぜひ足をお運びください。出入り自由です。講演の内容は封入チラシ、または 19 ページのイベント紹介をご覧ください。　　（編集子）

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903 年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000 円)から	☆入会金	個人 2,000 円
	学生	１口(4,000 円)から		学生 1,000 円
	一般法人会員	１口(100,000 円)から		法人 5,000 円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.116　No.7（2019年9月20日発行）　　発行人 平林 博　　編集人 西本達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　　Fax: 03-5640-1576　　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/